



「HEARTS Vol.4 発行に寄せて」

兵庫医科大学病院 病院長 太城 力良

3月11日午後に発生した東北地方を中心とする大地震にて、被災された方々には心からのお見舞いを申し上げますと共に、犠牲となられた方々に対しまして哀悼の意を表します。

平成7年に阪神・淡路大震災を経験した当院としましては、現地の皆様の震災被害の悲しみとその恐怖はいかほどか、ご心中を察して余りある状況でございます。現在も救助を待っておられる被災地の皆様の安全と、一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

さて、医療情報誌「HEARTS（ハーツ）」は、兵庫医科大学病院が地域の拠点病院として行う様々な取り組みのうちの一つとして、患者さんをはじめとする多くの方々へ確かな「情報」をお届けすることを目的に、平成21年8月に創刊されました。

創刊号（Vol.1）では「がんに立ち向かえ」、Vol.2では「生活習慣病に打ち克つ」、Vol.3では「これからのチーム医療」と、これまで様々な角度から「医療」に関するテーマを取り上げ、情報の提供に努めてまいりました。

この度、平成23年4月末に発行する今号（Vol.4）からは、「疾患」に視点を置き、それぞれの「症状」「治療法」「気をつけておきたいこと」などを、読者である患者さんに分かりやすく提供できる情報誌へとリニューアルいたします。

現在、兵庫医科大学病院は41の診療科（部）それぞれに専門医が多数在籍しており、お互いに協同して診療に従事しております。これらの専門医がそれぞれの立場から1つの「疾患」に対して情報を提供することで、多方面から見たより正確な情報をタイミングよくお届けすることができると考えております。

ぜひお手元に保管していただき、手軽な「医学辞典」としてご利用いただければ幸いです。

知
って
お
こ
う

アレルギー疾患

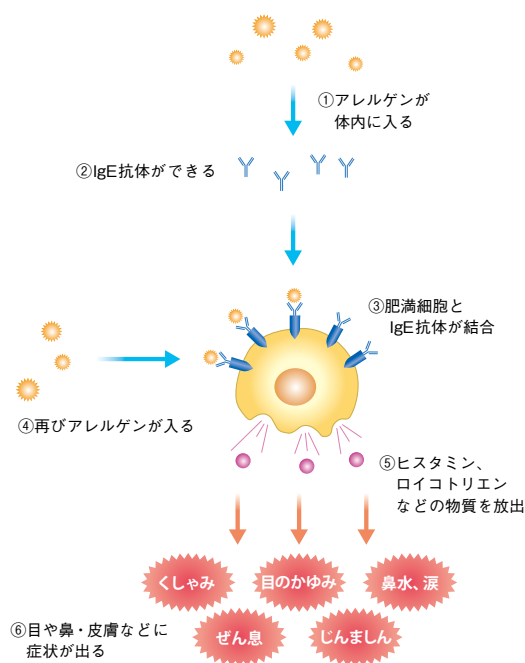
●アレルギーのメカニズム

アレルギーとは、外部から侵入したウイルスや細菌などの異物を排除し体を防御しようとする免疫機能が過剰に働いて無害なものにまで反応し、体に悪影響を及ぼすもの。専門的には4

つの型に分類されるが、一般にアレルギー性疾患と呼ばれるもののほとんどが、外部から入ってきた物質に対してできた抗体（免疫グロブリン）が原因となるタイプのものだ。

体の外から異物が体内に入り込むと、それを排除するために

アレルギー反応が起こるメカニズム （抗体が原因となる場合）



抗体が作られる。この異物のことを「アレルギー」と呼ぶ。抗体には5つの種類があるが、その中でもIgEという抗体がアレルギー反応を引き起こす原因となることがわかっている。アレルギーの侵入によって作られたIgE抗体は、肥満細胞と呼ばれる細胞と結合し（感作）、そこに異物が再び入ってくると、肥満細胞の中からヒスタミンやロイコトリエンといった物質が放出される（発症）。これらの物質が体の各部にまわることで、炎症反応が引き起こされるのだ。炎症反応が鼻の粘膜に起こるとアレルギー性鼻炎、眼の粘膜ならアレルギー性結膜炎、皮膚の場合はアトピー性皮膚炎や蕁麻疹（じんましん）が起こることになる。

●アレルギー性鼻炎

スギ花粉症に代表されるアレルギー性鼻炎は、アレルギーを鼻の粘膜から吸入することで、くしゃみや鼻水、鼻づまりなどのアレルギー症状が起こるもの。一旦発症すると、睡眠障害、集中力低下、小児では学力低下、成人では生産力低下などにつながる。花粉症のように一定の季節にしか症状が出ないものを「季節性」、季節に関わらず年間を通して症状がみられるものを「通年性」という。

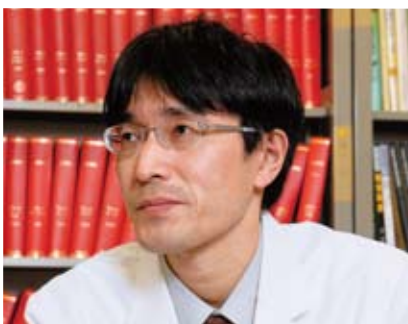
花粉症の場合、代表的なものは2〜3月頃にピークを迎えるスギ花粉症だが、そのほか春から夏にかけてはヒノキやマツ、カバ、ブナなど、夏から秋にか

今春も多くの人を悩ませたスギ花粉症。ようやくピークが過ぎたといっても、安心するのはまだ早い。スギ以外の花粉やその他の原因で、突然アレルギー症状が出ることもある。アレルギーの原因やタイプを知って、きちんと対策をとろう。



けては、イネやヨモギ、ブタクサなどがアレルギーとなることが多い。一方、通年性のものは、ハウスダストやダニ、カビ、ペットのフケ・毛などがアレルギーとなる。

「予防には、とにかくアレルギーを回避し、体内に取り込まないことが大切です」と語るのは耳鼻咽喉科の都築建三講師。ハウスダストやダニが原因なら、



耳鼻咽喉科 都築 建三講師

アレルギー性鼻炎の代表的なアレルゲン



丁寧に掃除をして家庭内を清潔に保つ。また、花粉症の場合は、花粉が飛び交う季節にはなるべく外出を避け、外出時にはマスクや眼鏡などを装着するほうが良い。服や洗濯物にも配慮し、家の中に持ち込まないことも心がけたい。「現在は症状がなくても、アレルゲンを取り込んでいざアレルギーができてしまうと、症状が始める可能性もあります。自分花粉症ではないから大丈夫と思っている人でも、花粉が多い日にはなるべくマスクなどの対策をしたほうが良いでしょう」。

都築講師は、「症状が出ている人はほうっておくと炎症が慢性化し、ひどくなることもあるので、なるべく医療機関を受診して正しい治療を受けたほうが良い」と話す。治療は、基本的には、抗アレルギー剤の内服と点鼻薬を使って症状を抑えるものとなるが、重度の鼻詰まりで、薬物療法で改善がみられない場合には、レーザーや電気メスで鼻の粘膜を焼く、あるいは鼻の内部の形状を矯正して通気を改善するなどの手術を行うこともある。ただし、これらは症状

を出にくくするものであり、アレルギーそのものに対する根治治療ではない。

アレルギーに対する根治治療としては、「減感作療法」がある。アレルギーのエキスを皮下に注射する方法で、その濃度を徐々に濃くしていく、だんだんと体を慣れさせる。完治も期待できるが、数年以上、定期的に医療機関に通って接種しなければならぬため、根気よく続けることが必要になる。現在はまだ保険適用にはなっていないが、パンの切れ端などにエキスをしみこませて舌の裏側に投与する方法(舌下投与)もあり、痛みもなく患者さん自身が自宅でできる方法として期待されている。

アレルギー性結膜炎

アレルギーの症状は、眼の結膜が炎症を起こすアレルギー性結膜炎として現れることもある。花粉をはじめ、ほこりやダニ、カビ、時には食物や紫外線がアレルゲンになる。かゆみや異物



眼科 神野 卓苗准教授

感、ゴロゴロ感のほか、白い目やにが出たり、涙が止まらなくなったりするなどの症状がみられ、ひどくなると、まぶたの裏に小さな瘤のようなものができることもある。

治療は基本的に抗アレルギー点眼薬の処方になるが、花粉が飛び始める少し前から使うことで、予防にもなる。ただし、眼科の神野早苗准教授は、「花粉症は全身の病気。抗アレルギー剤の飲み薬を服用するなど、目だけでなく全身の対処が必要となります」と話す。

もちろん、アレルギー性鼻炎と同様、アレルギーをできるかぎり避けることが望ましい。花粉などが入ってかゆみが出てい

る場合は、市販の洗眼薬で目を洗うことで楽になることもある。「特にお子さんは、春季カタルという重症のアレルギー性結膜炎をおこして角膜潰瘍が生じることもあります。また、かいてはダメだといわれ、目の周りやこめかみを強く叩いて網膜はく離になった例もあります。注意して早めに医師の診療を受けましょう」。

皮膚のアレルギー

アレルギー反応で、皮膚にかゆみを伴う赤い発疹ができるのが「蕁麻疹」だ。急性のものや慢性的のものがあ、体調不振やストレスにより発症しやすくなることもある。

花粉やほこり、カビ、ペットの毛などもアレルギーとなるが、日本人の場合、食物がアレルギーとなることが多い。中でも「3大アレルギー」といわれるのが、卵・牛乳・小麦。他にも食物アレルギーを引き起こす原因となるものは多く、厚生労働省により

アレルギー表示されている食品

必ず表示される7品目 (表示義務)	卵、乳、小麦、えび、かに、そば、落花生
表示が奨励される18品目 (任意表示)	あわび、いか、いくら、オレンジ、キウイフルーツ、牛肉、くるみ、さけ、さば、大豆、鶏肉、バナナ、豚肉、まつたけ、もも、やまいも、りんご、ゼラチン

アレルギー表示が義務付けられている食品もある。また、薬品が原因となる薬疹や、疲れやストレス、日光、寒冷などが原因となる場合もある。

腫れてかゆみを伴う皮膚のアレルギーとしては、接触皮膚炎もある。アレルギーに接触することによって発症し、ひどくなると水泡ができる。ウルシやハゼなどの植物のほか、化学繊維や羊毛を使った衣類、化粧品、子どもの場合はおもちゃやおもちゃなど、日常使っているものもアレルギーとなることがある。

金属がアレルギーとなるもの



皮膚科 山崎 清文主任教授

は一般に「金属アレルギー」と呼ばれ、ピアスやネックレスなどのアクセサリや、腕時計、眼鏡、衣類の金具などにより発症したり、歯科金属によって口の中に炎症が起こったりといったケースがみられる。また、塗料や染料のほか、チヨコレートなどの食品にも金属が含まれるものがあり、知らないうちに触れてしまうこともある。

「その他、石鹸や歯磨き粉、白髪染めなど日常的に使っているものに反応することもあります」と話すのは、皮膚科の山西清文主任教授。接触皮膚炎の場合は、接触してすぐに症状が出るとは限らず、原因に気づかないことも多い。

「大切なのは、アレルギーを特定

「アナフィラキシーショック」

アナフィラキシーとは、アレルギーに接触した後、数分〜数時間で症状が現れる急性アレルギー反応の一つ。急性に動悸や吐き気、蕁麻疹などの症状が現われ、重症の場合は下痢や呼吸困難、血圧の低下といった命に関わる危険な状態に陥ることもある。



乳幼児の場合、卵、牛乳、小麦などで食物アレルギーを起こしやすい。

小麦のアレルギーは運動によって吸収が高まるので、食後に激しい運動を行うと起こる場合もある。また、アシナガバチやミツバチなどのハチ毒や、手術用のゴム手袋などに使用されているラテックスマもアレルギーとなることがあり、医療従事者が手袋をつけただけでアナフィラキシーを起こすこともある。

